ひたすらセックスばかりする日々

丘でむさぼり合う男女

タクシーの女性運転手さんと駆け落ち逃避行

今年から値上げになったビニールの買い物袋。ユウジは個人で用意した布製の手提げバッグを持って家を出た。少し家電量販店でイヤフォンを、ホームセンターでも買い物が一つ二つあった。タクシーを２分前にスマホで呼んでいた。

商業施設が並ぶ駅前方面まで歩くと３０分ほどかかる。

そのためわりと普段からユウジはタクシーを利用することが多かった。

タクシーはほぼ待つことなく到着した。自宅前に。

今ではインターネットを用いた運転手の現在地把握システムによってすぐやってきてくれる。ドアが自動で開く。運転手さんは女性だった。

「今西さんですね？」

こちらを振り向き尋ねる運転手さん。

「はい・・・・」

特段何を意識するわけでもなく素っ気ない感じでユウジは答える。

ネームプレートに川辺と書いてあるのがチラッと見えた。

「駅前まで行ってもらえますか？」

「駅前ですね。分かりました」

ちょっとした買い物である。身なりにはこだわっていなかったユウジ。暑さで水色のタオルを首に引っ掛けていたユウジを見て運転手さんが言った。

「駅前のサウナでも行かれるんですか？」

ユウジはゆっくりと首を振る。

「いや・・・・ただの買い物です。これですか？暑いんで汗かくから巻

いてるだけなんです」
　何の変哲もない会話。
　しかし話題は自然と温泉の話になった。

　「温泉のジャグジーっていうんですか？あそこに股間を持っていくと気持ちいいんですよね」
　冗談交じりにユウジが言う。半ば冗談ではなかったけれど。
　「エッチなことですわね・・・・ふふ」
　運転手さんは笑う。
　そしてユウジが言った。これはとどめの一撃！！？
　「ペニスの毛・・・・・剃っちゃってるんです・・・・・」

　「あの・・・・・エッチは・・・・・」
　「そ、そういう話題・・・・」

　車内に流れていたこの束の間の空気は何物にも例えがたいものだった・・・・。

　・・・・気がつけば駅前を通り越してタクシーは走っていた。

　「・・・・あっ！！・・・・通り過ぎちゃいましたっっ・・・」
　運転手さんが汗をぬぐう。
　「・・・・・いいですよ。そのまま行ってください・・・・」
　運転手さんはハンドルをしっかりと握り続けている。
　ユウジが言う。
　「・・・・・で、エッチってどう思います？？」
　エッチな会話は続き、ほぼ無心のユウジと運転手さん。
　車は街の中心部を過ぎ、外れのインターチェンジに向かっていた。
　「どこへ行くのか・・・・なんだか変な状況ね」

　運転手さんは鼻をぐすっと鳴らした。
　「セックスは‥‥そりゃすっごく良いものだって思うわ。私も‥‥‥‥」
　そのままタクシーは高速へと入っていった。

「・・・・・・で、セックスってやっぱり生死をかけるものってこと？」
会話は長時間続いていた。ユウジの自宅前を出てから既に１時間以上が経過している。
「それでいいんじゃないですか？社会生活も全て・・・」
運転手さんが遠くを見ながら呟くように言う。
「実は私・・・・・・」
運転手さんは、ＯＬの長年頑張ってきた経験を捨て、タクシーの運転手として心機一転人生をやり直したのだと話した。
運転するのが昔から好きだったとのこと。

培ってきた経験。積み上げてきた社会的地位や状況。
そういったものをすべてと取り換えてもセックスの快楽は凄い。
「そのためにペニスとヴァギナがある・・・・・と」
行きつくところまで会話は進んでしまった二人。高速を下り、丘が前方に見えてきた。

―――――― 体験版はここまでです。――――――――――――――――――――――――